

「あずき博士の豆類歳時記」

第2回 大平原ですくすく育つ十勝小豆

ホクレン農産部特任技監 加藤 淳

北海道十勝地方の農家では、カッコウの鳴き声が聞えてくると小豆の種まきを始める。例年、5月25日前後がその最盛期となる。5月下旬とはいえ、この頃はまだ遠くに見える大雪山脈には白い雪が残り、早朝には肌をさすような寒さを感じる日もある。晴れて澄んだ空気の下、広大な大平原が続く畑に機械で正確に種がまかれていく。

芽が出始めるのは、種をまいてから約2週間後となる。同じ豆類でも、小豆と大豆では発芽の様子が異なっている。小豆は子葉（種子の部分）が土の中に埋まった状態で、上胚軸（茎）と初生葉が地上に伸びて発芽する。これに対し、大豆は子葉自体が地上に持ち上がって発芽する。

発芽後はぐんぐんと生長し、2か月程度で茎の長さは40～60cmほどになる。7月下旬に開花時期を迎え、8月中旬頃まで次から次へと花を咲かせる。蝶のような形をしたかわいい黄色い花である。花の形は、同じマメ科の植物であるスイートピーにも似ている。花の色については、大豆やいんげん豆では、白やピンク、うす紫などいろいろあるが、小豆の花は黄色のみである。



黄色くかわいい小豆の花

しかし、開花時期に畑に行っても、小豆の花を見つけることはなかなか難しいかもしれない。広大な小豆畑は、一面、緑の葉に覆われており、遠目からは黄色い花は発見できない。しかし、近くで生い茂った葉の陰をのぞいてみると、かわいい黄色い花を見つけることができる。

開花後まもなくすると莢が伸び始め、緑色だった細い莢が、開花後30～35日程度で豆粒の詰まった莢へと成熟する。莢の中には6～10粒ほどの小豆が入っており、莢が乾燥し褐色になると、収穫時期を迎える。本来、小豆は霜に弱く、一度でも霜にあたると品質が著しく低下してしまう。

かつて十勝地方では、早ければ9月下旬に霜が降りたため、霜の予報が出ると慌しく小豆の収穫に取り掛かっていた。現在では、9月に早霜が降りることはなくなり、通常、9月下旬から10月中旬にかけて、ピックアップ収穫機またはダイレクトコンバインといった機械を用いて、数haもある広大な畑で小豆の収穫作業が行われる。



開花期を迎えた十勝の小豆畑

小豆は日本各地で栽培されているが、その生産量の大部分は北海道産（令和5年産で全国の約94%）である。種まきや収穫の時期は、それぞれの産地で異なる。畑の土壌条件や、その年の気象条件によっても、小豆の品質は大きな影響を受ける。同じ品種であっても、栽培環境の違いによって色や大きさも異なり、その成分や風味にも微妙な違いが出るのである。

令和5年は北海道でもかつてないほどの猛暑に見舞われ、せっかく咲いた小豆の花も、暑さで落ちてしまい、莢が付かずに収量は激減した。これから迎える今年の夏は、どのような天候になるのだろうか。豊穡の秋には、赤い宝石のような美しい小豆に出会いたい。